

# 「問題文芸論」について

榎 本 隆 司

一九一五（大正四）年一月一日の「読売新聞」紙上に、中村星湖は『問題文芸の提起』という一文を寄せた。そこでかれは、イギリスの劇作家ウィリアム・アーチャーが早稲田大学での講演で「社会劇といふものはやや特殊な物であるにしても、心理劇は普遍的であり永久的のものである」という意味のことをいった点をひき、つぎのようにつけた。

……同じ人間生活のうちでも「事件」はいかに怪奇偉大に見えやうとも、心理の経過を伴はずには、張子の虎の怪奇、木石の偉大にも如かないのである。（略）『事件は浅く、心理は深し！』この僕の断案は、極めて陳腐であつて、同時に極めて清新な真理である事を僕は信じてゐる。――

星湖のこの発言は、前年度の文芸界に対するおなじ紙上での要求を補足したものだ、しかしここでかれは、単なる「心理劇」や「心理小説」の出現をのぞんだのではない。「愚痴の百萬遍を羅列して心理的芸術の至極と思ひ誤る事を避けなければならない」というかれは、作家は過去や現在の生活から、さらに未来のそれへと眼を向けるべきだといひ、「現実から理想を作り、幻滅から

新生を予想し、現実曝露の悲哀から理想実現の歡喜に向はうと努力する事」を要求して、さらにつぎのように結んだ。

未来の指示（指示とはならないまでも暗示）に富んでゐる芸術――それが今、僕の望んでゐる芸術である。それは勿論、決して芸術の爲めの芸術ではない。それは「未来の生活の爲の芸術」である。別に謂はば「問題文芸」である。心理劇も心理小説も、それ等があらゆる意味で問題적인になつて始めて今日以後の僕の心を満たす芸術となり得るのである。

僕の謂はゆる問題的文芸の裏には、といふよりはむしろその根本には、問題的生活が無ければならない。日に新に日に新生活を追ひ求める強情執拗な心がなければならぬ。

この提言は、まず、これまでの自然主義思潮にあきたらず新しい理想をもとめていた大正期の思想状況を反映したものとしてうけとられる。たとえば、前年の文芸界を概観した「早稲田文学」（大正四年二月）が、「嘗て欧州から輸入された文芸上の自然主義思潮によつて一度び無自覺な空想世界から、肉体的存在の現実世界に引き出された吾々は、最近に至つて更に社会的生活者として

の人間世界の現実へと引き上げられた。そして謂ふところの社会的存在としての自己、現代文明の創造者としての自己の生活の如何なるものであるかを初めて考へるやうになつて来たのである」として、それゆゑに「喜ばしき期待」を将来にもつ、といったことなどにかかわつていくものであった。他方ではまた、すでに白樺派などの動きにもその一面がうかがわれたわけだが、それをあえて「問題的」という表現を用いて提示したところに、かれはこれの意図があつたようだ。じじつ、のちの発言だが、かれはこれによって「小説壇の覚醒を促して置いた。」といっている。（早稲田文学）大正四年六月）。かなり自負するところがあつたとみてよからう。が、じじつはその自負なり意図は、きわめてあいまいな漠然としたものでしかなかった。これももの所の説に明らかなのだが、この一文でもけっきよく「受動的でなくて能動的である」とか「運命的でなくて自己的である」といったようないい方にとどまり、具体的にどうあるべきなのかという点にまで言及しえなかつた事実が、なによりの証左であつた。そしてそのことが、いわばこれを契機として展開する「問題文芸論」そのものの、多様な、しかも未分化な性格をみちびきたす要因ともなつたようにおもわれる。

ところでこのような星湖の提言のあいまいさは、まずアーチャーの発言をどこまで正しく理解しえたのかという疑問につながつていく。さきにひいたような意味でアーチャーの発言をうけとつた星湖が、はたして発言者アーチャーについてどれだけの知識をもつていたか、それはさだかでない。が、おそらく、イブセンの

翻訳者で、いわゆる自由劇場運動の中心的存在としてイギリス近代劇の開拓者となつたアーチャーその人であることを十分理解していたとはおもえない。だからこそかれは、たぶん深い心理的な裏うちをもたない、いわゆる傾向文学を否定する意味で「社会劇より心理劇を」といったのであらうアーチャーの発言を、「事件は浅く、心理は深し！」というような断案のもとにうけとることもなつたのだ。社会的な問題とか生活とかが、ただちに単なる「事件」としておきかえられ、そしてそれに対する「心理過程」の描写という問題へと還元されていった早呑込みが、そこにはつきりとうかがわれるのである。つぎの一文は、この年十二月の「新潮」にのつたものだが、そのことを端的に物語っている。

「読売新聞」の新年号に於て、私は我國の文芸界、殊に小説劇等の創作に対する希望を述べて置いた。それは作家の生活なりそこから生れる作品なりが、もつと心理的に深く入つて欲しいといふ事と、もつと問題的に日々になつて欲しいといふ事とであつた。（略）

殊に社会的でなければ問題でないやうに考へ々ある輩に至つては、自分一個の靈魂を所有しない馬鹿者である。問題のと云ふ事は屢々社会的といふ事であり得るが、それは一方に、永久に個的、自我的である事を知らなければならぬ。発掘拡大も問題であれば、沈潜凝視も問題である。要は生活の本質をより良くしやうと努める所に在るのである。

（「新潮」大正四年十二月『問題文芸』の是非及び諸作家の活動振り）

「問題のなどと言ふ事は馬鹿氣てゐる、心理的でなければならぬなど、言つた人もある。苦笑し、若くは憫笑せざるを得ない。」とか、「心理的と問題的とは言葉こそ違ふが、元々二に分ける事は出来ないものだ。」とか、ここでもあいまいさはすこしも解消していない。そして心理的ということと問題的ということがふたつにわけないものであるといういい方は、けっきょくかれのいわゆる「問題的」ということが、「心理過程」の描写という点にウエイトをかけた意味であつた事実を裏書きしている。つまりアーチャーの立場が正しく把握できていなかったということである。ことの発端はここにあつた。しかも、こうした不十分な理解を前提として、星湖はさらにもうひとつの過ちを犯すのである。すなわち「問題的」といい「問題文芸」ということばの誤用である。つまりかれは、アーチャーのいわゆるプロブレム・ドラマ(問題劇)を、そのままおのれの主張の旗じるしとして高々とかがけたのである。

それはちょうど、かつて一九〇〇年代の文壇が、自然主義思潮の流入を、ナチュラリズム・プロバールとしての本来のすがたでうけいれられないままに、いわゆる日本自然主義というカッコづきのものとして成長させていった事情に通ずるものといえようか。ナチュラリズム・プロバールの科学的方法が、日本の風土に正しく定着しえなかつたことと、アーチャーのプロブレム・ドラマの理念が、それとして十分に星湖に理解されなかつたことと、そこには閉ざされた日本の現実の投影がみられるとおもうのだが、それとともにまた、外来の思潮を汲みいれる場合の、特有な性急さを

そこに認めることができるのではないか。本来異質な風土に育つたものであることへの顧慮を欠き、しかもそれを吸収するに當つては、移植すべき土壌の吟味もせぬままに概念的にうけいれを急ぐあり方が、そこにみられるのだ。

ともあれ、プロブレム・ドラマということばの誤用によって、星湖は二重の過ちを犯した。しかもおもしろいのは、こうした二重の過ちにもかかわらず、たとえその早呑込みの中に、星湖はある意味でアーチャーの立場に應ずるような志向を示していることだ。すなわち過去・現在ばかりでなく、未来を暗示するような文学の出現をもとめている点である。このかぎりでは、かれはアーチャーのいうプロブレム・ドラマを正しく發展させていく契機をこの提言の中に有していたわけだし、またみづからいうように「小説壇の覚醒を促す」という立場は、おのずから時勢のもとに應ずるものとして認めることができる。そして、それゆえにこそ、やがてこれが文壇の視聴をあつめることにもなったのであらう。が、のべてきたとおり、星湖自身のあいまいな理解と徹底を欠いた発言のために、以後これに対する反響はきわめて多様なものとしてでてくることになった。そしてそうしたこの年の「問題文芸論」の多様性は、そのままこの期の文学界の混迷をつたえるものと考えられるが、それが、せつかく大きな課題として展開しそうな様相を呈しながら、けっきょく未分化なかたちのままで立消えていつてしまったことのもつ意味は、時代の個々の文学現象にかかわっていくものとして看過できない。さらにまた、星湖の提言のあいまいさはそれとして、というよりそれゆえに、星湖の

意志とは無関係な場でこの問題が論議されることになったという事実は、そのまま次代の文学をみちびきだすひとつの胎動として注目される。以下にその間の事情をきわめてみたい。

新しい年の創作界に対する希望というかたちでなされた星湖の問題提起は、たまたまそれが不況を脱すべく模索していた時代一般のおもいにつながるものであったことから、ジャーナリズムの追うところとなった。反応はまず、「文章世界」二月号で『新年の文芸評論』をとりあげた三井甲之によって間接的に示される。

ここで三井は、阿部次郎の『神かれざる心』を『三太郎の日記』との関連においてとらえ、「それは『粗野な利己主義的唯物論の見地の如何に不十分』なるかを示すもので」「又社会的結合と史的開展とを顧みぬ、其故に超個人意志と宗教的同胞の意義を認めざる古いラシヨナリズムの残りのものだ。」と批判し、「評論界が実社会的活動に近づいて認識論的の論理に没頭して居らずに實際の道德的問題の解決に向はむとする」その趨勢に逆行するものだといった。これは、やがて「人格主義」を提唱することになる阿部の、いわゆる文化主義的な、反政治的あるいは非政治的傾向に対する批判としてうけとられるわけで、それはおなじ文中で、生田長江や大杉栄の社会的意識や歴史的な配慮を肯定的に指摘していることでも明らかである。直接「問題文芸」については言及していないのだが、こうした三井の発言は、星湖の提言に重なる部分をもっており、かりにかならずしも反応としてできたとはいえないにしても、それがうけいれられていくべき地盤として認めるこ

とはできようとおもう。

直接的な反応は翌三月の「文章世界」にあらわれた。『二月の文壇』を語った石坂養平の一文においてである。この文章で石坂は、おもしろいことに、前号での三井の阿部に対する批判をとなえ「街頭万能論者の謬見」だときびしく批判して、逆に阿部の存在を「わが評論壇の大なる誇りである。」とまでいっている。しかもその石坂がおなじ文中で、「現実の批判解剖」から問題文芸が生れるといった田中純の見解（『早稲田文学』二月『新らしき幻影の要求』を正当とし、そのおり星湖の所論を肯定的にとりあげているのである。かれはそのため作家その人に哲学的思想を要求するのだが、かれが「問題」を「現実批判」という視点でとらえていることはいちおう注目される。しかしそれも、より深く具体的に追求されることはなかった。

それにしても、たまたま阿部に対する評価で真向から対立した恰好の両者の見解が、またそれぞれ他の一面で星湖の問題提起にふれあう、あるいはそれに応じていくるものを内包していたという事実は興味をひく。つまりそれは、星湖の提言が、期せずして時代の要求するところに応じていくべくタイムリーになされたということと、しかもそのうけいれられ方は、それぞれの場に応じて多少ずつ異っていたということをそのままに示しているのである。「問題文芸論」の多様性が、当初の反応の中にすでにそのきざしをみせていたわけである。このようにみえてくると、当時の時評的発言と「問題文芸論」との関係、つまり、それらが星湖の提言に重なっていく部分と、逆に多様な発言として発展していく地

盤をきわめることが、「問題文芸論」の展開状況をとりえる上に大切な作業になってくるわけだが、その意味では、当時ややはり物議をかもした文芸家の代議士立候補問題における是非の論などがあわせて考えられる。そのいちいちについてふれる余裕はもちろんだが、一例をあげてみると、近いところで「中央公論」の三月月号に田中王堂の『文芸家と政治運動』という文章がみられる。王堂はここで、まず文芸家の立候補を批判する諸新聞を非難し「私は是等健気な新人に対する新聞の調子の如ににも軽薄なのを惡むものである。」という。しかし反面そうした批判を受ける一半の責任は文芸家にもあったとし、その作品活動における政治的無関心さを指摘してつぎのようにのべた。

(ヴィクトル・ユゴオとかトルストイとかバアナアド・ショウ等は)政治上に於ける彼等の手腕や経綸はどうであつても、兎に角、彼等は其の著作に於て政治に対して興味と親しみを有つて居ることを証拠立てゝ居る。彼等は意識的に、否、執意的に、政治の中に生き、政治を呼吸して居るからである。(それに対しわが國の文芸家は)私の生活、私の言論に於てはどうであるにしても、彼等の公けにする作物に於ては、彼等の政治に対する理會も興味も阿つながら極めて稀薄(であり)彼等は創作に、評論に、政治の要素を考慮の中に入れてなければ到底満足なる、徹底する帰結に到着しない場合にも、尙は無智からでなければ、故意に、其れを輕視し蔑視して居る傾向がある。——立候補については、けつきよく「文芸家が政治的に社会的に活動するには、代議士たるよりも、一層も、二層も有効な道がある」

として、その作品活動を通しての政治への参加を説いているのだが、この王堂の發言は、おりからの「問題文芸論」を支えていた時代のひとつの代表的見解として注目される。とくに文芸家の政治的無自覺さを痛撃している点は、まさに時代の切実な要望を背にした發言とみられるわけで、具体的な問題提示としても高く認めていいとおもう。それはある意味で、「問題文芸論」そのものとして提起されてもよかった發言であり、そういう点からいえば星湖のあいまいな提言を具體的に方向づける契機をはらんでいたともいえるし、裏返していえば、「問題」という概念規定が、それぞれいっこうに噛みあつてこないひとつの状況をつたえてもいたわけだ。

しかし「問題文芸論」そのものとしては、相変らずなら明確な方向をもちだしえないままに展開し、しかもこの年の後半に入つて、にわかに各誌上を賑わすことになるというようなくはぐなすがたが露呈されていくのであつた。

七月の「文章世界」で本間久雄は、「一見沈滞してゐるやうに見える文壇にも、暗黙の間に何等かの方面に転進しやうとし、乃至は進転させやうとする傾向の見えることは事実である。」と前置きして五月の「時事新報」の『我等が要求する明日の小説』(五日から十二日まで掲載)における長谷川天溪、相馬御風の所論にふれたあと、「早稲田文学」(六月)で星湖が問題文芸の出現を要望している点に言及し、「実際、自分なども、最も今の文壇に要求してゐるものは問題文芸の出現である。」と共感を寄せ、さらにつぎのようにのべた。

……所謂傾向小説、觀念小説の低級なものから、イブセン、トルストイ、ストリンドベルヒの作物などに、吾々が達着するやうな、人生そのものの根柢に横はるやうな大きい問題を提供するやうな高級な問題文芸に至るまで、そこに幾多の階段があることいふまでもない。そして又吾々の要求する問題文芸が、そこに含まれた問題が、直ちに人生そのものの根柢に触れたものであることも亦云ふまでもない。(略)換言すれば出来るだけ多く、具体的であり、特殊的であり、個的である事象と問題とを通じて、直ちに普遍的な、全的な事象と問題とに触れるものでなければならぬ。吾々が真に要求する問題文芸は、蓋しかくの如き意味の問題文芸であることいふ迄もない(『六月の文壇』)。

すでに明らかなように、ここでも「問題文芸」というものの規定は、ひどく漠然としている。「そこに幾多の階段があるこというまでもない」といういい方が示しているように、星湖のあいまいさは、いぜんとして明確な具体性をもって方向づけられていない。「問題」をどこにとらえてきたらいいのかという点でも、きわめて概念的な解答しか与えられていないのである。むしろそれは、時代社会の内包する諸問題に鋭い批判のメスをいれるなどということとはほど遠く、単に、漠然と、新しいリアリズム文学への要請を示したにすぎない恰好になっている。「人生の真理に触れることであらねばならぬ。」といい、しかもそれは中沢臨川などのごとく「時所を超越した、究漠な普遍的境地に求められ、予想されたものであってはならない」とのべていることでもそのこと

は明らかである。いわばそれは、時代に定着した新しい自然主義文学への回帰ということさえあった。イブセンやストリンドベリがひきあいだにだされていながら、かれらの文学が時代の現実にとどろきに根をおろしていくべきかという点ではいっこうに無自覚であった。だからそれは、のちの『自然主義前派の跳躍』(大正五年十一月生田長江)をおもいおこさせるやうなひびきをさえてもつていた。そういえば、星湖の提言の中にも、そうしたおいがなかったわけではない。ある意味で、自然主義文学のまきかえし運動を企図したかとおもわれるふしもうかがわれたのである。本間の共感もむしろ当然であったというべきだろうか。いづれにしても「問題文芸」の行方は、相変らず不分明であった。そして不分明なままに論義が重ねられた。こうした中で、「早稲田文学」七月号における田中純の『最近の評論壇』と題した発言は、やや注目していい方向づけを示していた。

田中はまず、さきにもあげた「時事新報」紙上の天溪の所論をとりあげていう。

天溪氏がデモクラチックの精神を小説の中に見ることを要求して居たことは吾々に最も多くの興味を覚えさせた。事実最近の評論壇に於て最も多くの興味と熱意との注がれて居る題目は、デモクラチック精神の勃興を促進しようとする主張である。自然主義運動の後を受けた数年間の一種の模索時代の末に、吾々の求めて居たものの、何であるかが多少明かになった、それは此のデモクラチック精神であったのである。――

この「注目を要する事実」を、つまり精神を、「社会的闘争に

依て「貫徹しようとする大杉栄らと、「個人主義の徹底に依て」実現しようとする相馬御風らの二派にわけてみる事ができると指摘した田中は、反対者としての中沢臨川、調和者としての田中王堂らを紹介したあと、さらにつぎのように結んだ。

尙最近一部の人々の間に問題文芸の要求が起つて居ることは喜ばしい現象である。デモクラチック精神の勃興と共に、具体的問題の具体的解決と云ふ様な声が聞かれるが、その最も手近い機会は創作群を通して得られるのであらう。吾々は此の意味で問題文芸の出現を希望し、同時に問題的に見た創作群も少しは出て可いと思ふ。

田中がどこまで明確に「問題文芸」を考えていたかはわからないが、すくなくとも、それを「デモクラチック精神の勃興」という事態に結びつけた具体性は、いさう注目すべきものとして認められようとおもう。しかも、結びにおいてなお、そうした意味での問題文芸が要望されているという事実は、当時まだ、およそそういう性格の文学的結実がみられなかったという状況を語るものとしてうけとられる。田中自身の問題文芸への要求は、従来のそれを一歩おし進めた具体性においてかなり高く認めていいとおもうが、しかも語られた未分化な現況は、七月の「中央公論」臨時増刊号ではつきりと実証されなければならなかった。それは、問題文芸への要求が、すでに時代のそれとして無視しえないまでに昂まっていた事情を反映するものであったと同時に、それがいかにあいまいな多様さの中で論議されていたかを証明するものでもあった。

この号を「大正新機運号」と銘うった意気込みは、特集として『大正時代と社会問題の解決』というようなきわめて適切な論陣を張り、さらに「問題小説及問題劇十篇」をかがけて、その実を示すかのようであった。ところが論陣の方はともかく、華々しいタイトルのもとに並べられた十篇の作品は、いったい何が「問題」なのか、いずれもピンとはずれな内容のものばかりであった。ひととおりその陣容を示しておこう。

小きき魔壇(小説) 田山 花袋

結婚満期(脚本) 松居 松葉

彼女の生活(小説) 田村 俊子

吹雪の野を(小説) 中村 星湖

三角畑(脚本) 岩野 泡鳴

爆発(脚本) 中村 吉蔵

美女の死骸(小説) 上村 小剣

共益貯金(脚本) 池田 大伍

緑の野(脚本) 秋田 雨雀

魚玄機(小説) 森 陽外

作品ひとつひとつについてふれる余裕はないが、一瞥したところで、いったいどういう「問題」をこの十篇の作品から抽出してることができよう。問題があるといえほどの作品についてもいえよう。が、ことあらためて「問題小説」とか「問題劇」といわれる内実がどこに認められるというのか。そこには、問題がなさすぎるがゆえの問題作といたいような皮肉な現象さえみられるのである。甘いセンチメンタリズムに覆われた星湖の一作をみ

でもそれは明らかだ。「問題」に対する考え方が、どこで噛みあい、どう結びついているのか、その解答をみいだすことは困難である。じつにそれはジャーナリズムの無自覚無定見さを暴露するはかになんの収穫もえられないものでしかなかった。当時の各誌上における見解も、おおむねそうした意味でこの特集の有名無実を批判している。

九月、「新潮」は「問題文芸論」を特集し、この問題に真正面からぶつかった。生田長江・小川未明・近松秋江・相馬御風らがそれぞれ視角からの稿を寄せた。ここに至って星湖のいわゆる「問題文芸」は、完全に文学界の重要な課題になってきたかの概があった。

まず長江は、自然主義全盛時代に「流行の偏見を多少なりとも矯め直」すべく力説したことがあったと歴史的な展望を試みたあと、「問題」をひろい意味にとると問題文芸というものがなんだかわからなくなってしまうからとして、「特殊の時代、特殊の社会に起った特殊の問題に限られなければならぬ」という。そしてそういう前提にたつ以上「問題文芸の問題が、主として文明史的社会的の興味を動かすものであるべきは、推定するに難くない。」とその立論の場を規定する。ついでかれは、『八犬伝』や『不如帰』を例示して、たとえば後者については、家族主義と個人主義の葛藤という観点から「もっとも」と深刻に、大仕掛けに取扱へるものであり、またさうすることによって、作品全体がずっと立派になり得る」と具体的に問題提示をしている。そして最後に「この日本といふ国、明治から大正へかけての社会には、所謂問題

題になるべきものがごろごろ転がってゐる。それに文壇の傾向も変つてきたから「問題文芸のしつかりした物なぞも、そろ／＼出て来さうなものだ。」と結んでいる（『問題文芸の意義』）。

未明は『総ゆる問題は自己の生活にあり』と題して「問題文芸題材」のふたつの面を指摘する。すなわち「一つは人間とは何ぞやと云ふ昔からの人生問題の解釈から起つて来るさまざまな問題と、一つは現在の社会生活の上に於ける批判から生じて来るところの種々なる問題」とである。「問題文芸なるものは、真実なる倫理的批判を望むところから生れる」とするかれは、それゆえに「一つは現代文明に対する批判、一つは人間其の物の批判」こそが、その根源をなすものだと言つて結ぶ。

秋江はイブセンの『社会の敵』をとりあげ、「さう云ふ作品が先づ問題文芸と云ふのであらうが、私はさう際立って問題文芸と云ふものを分類しなくても、普通人間の真理に深く入って居る作品は、総べて其所に何等かの問題を提供して居ると思ふ」という立場から、「怒に社会と個人の衝突とか、新旧思想の不調和とか云ふやうな点ばかりを覗つて書かうとすれば、却つて甚だ浅薄なものになりはしないか」として「作品が人間の精神心理に深く立入つて描いて行けば、之皆問題なりと云ひ得られると思ふ。」とのべた（『問題は深さに依つて生ず』）。

御風は「問題文芸に就ての対話」という形式で、問題文芸論義の一般的な考察をおこない、星湖の提唱はむしろ「疑問文芸」ともいふべきもので「問題文芸と云ふ言葉で主張せられて来たところの文芸は、単なる生活上の疑問と云ふ以上に観念的に明確な輪



郭を持った問題を主題とすべきもの」だと規定している。そして「僕の望むのは何も問題文芸とは限らない。何でも好いから僕等の生活を根柢から動かし進める力となるやうな文芸さへ出てくれれば好いんだ。」とその対話を終っている。

こうしてみてみると、各人各様のうけとり方に变りはないにしても、問題の核心がおぼろげながらもつかめそうな、論としての輪郭がうかびあがってきいていることが認められよう。長江と未明は、社会問題への関心とか社会生活の批判という面で重なりあう立論の場をもっているし、秋江と御風におなじような積極的な立場を認めることはできないにしても、論義の焦点をとらえ、これへのいちおうの理解を示しているという点では、すくなくとも「問題文芸」というものの規定のしかたにおいておなじ次元に立ちうることを示している。どうやらいっこうにピントのあわない論義に、目鼻がついてきたという感じである。ことに注目すべきは、御風がアーチャーについて言及していることだ。直接星湖の論拠に関連していくのでひいてみると、「一体日本の文壇に向って最も明確に問題文芸の出現を要求した人は誰だらう。」という問いに対して、かれはつぎのような答えをだしているのである。

……僕の記憶では、先年来遊したイギリスのウィリアム・アーチャーだと云つてよい。アーチャーが早稲田大学に於ける公開講演の中で、オーストリティと人民との関係とか、ミリタリズムと個人の関係とか、トラディションと個人の関係とか云ふ風な問題を捉へて書くに現代の日本くらゐ面白い国は少ないのに、日本ではどうしてさう云つた作品の佳いものが出ないのだから

かと云ふやうな事を力を籠めて述べて居たのを僕も聴いた。このさりげない御風のことばは、それが、さりげない調子で語られていることとは別に、さきに指摘したとおり、アーチャーに対する星湖の理解の不十分さを傍証するものとして注目されるのである。ということとは、いま論義の渦中にある「問題文芸論」そのものが、そもそのスタートにおいて、それが不熟に終るべく運命づけられていたことをつたえるものでもあるということだ。御風によれば、問題はきわめて明確に具体的に示されていたことになる。それを星湖は、かえってまったくあいまいなものとして発展させてしまったわけである。そしてそのために、いまやひとつの方向をみいだしながら、なおなんの具体性をもその論義が帯びてこないやうな事態を招いているのである。賛否いずれにせよ、もし星湖が、御風のつたえるやうなアーチャーの発言に沿って、具体的な問題提起をなしたならば、この論義はもっとよほど実のあるものとして展開したにちがいないのである。オーストリティとかミリタリズムとかが、個人の生活の上にどれほど重くのしかかつてきていたか、国家権力と結びついて急激な膨張をとげつつあった資本主義陣営や、これに呼応して強大な力を貯えつつあった軍国主義勢力が暗い影をなげかけていた一九一五年の日本の現実に、たしかな眼を向けていくべきモメントは十分にもとめえたはずなのだ。アーチャーの鋭い指摘を耳にしながら、星湖はそれをなんのためらいもなく見落してしまった。「早稲田文学」九月号が、この論義を、文壇の「厭ふべき混沌沈滞の状態を突破しやうとする何物かの兆候ではないか？」とある期待をもって迎え

ながら、一方ではまた、「それとも一時的の言ふに足らない現象であらうか?」として、「その疑問を解決したいが為め」に『問題文芸の意義、価値及び形式』を特集したりしているのを見るにつけ、やはりそれが実情だったのだと背く反面で、なにか大きなずれを感じないではいられない。いっこうにふっけないまま低迷するこの論義のひよわさが、まずその具体的な志向を欠いていた点に起因してただけに、星湖の見落しは大きい。

ともかく、ひいた尾は長い。十二名の見解をあつめた右の特集もまた、停滞と、疑惑と、逆行とでしかなかった。主張はすこしも求心的に発展しなかった。たとえば内藤濯は「人間生活の更改を要求すること」だといひながらそれだけに終り、山田權柳はこの提唱をとにかく「進歩である」と迎えながら、そして「現前の社会文明事象に立脚して、最も自然的に、最も合理的に、最も必然的になされねばならぬ」と説きながら、しかもその可能性は「現時の社会文明の状態に於いては——頗る疑はしい」と危ぶんでいる。石坂は「現代生活上の活事実を捉へてそれに対する独自の批評と改造の方針とを示したものと規定するにとどまり、白鳥・泡鳴らは格別積極的な意味を認めようとしていない。さきに阿部を批判して大杉らの社会的意識を認めた三井は、すでに「問題文芸の意義と価値とに疑をさしはさ」むようにさえなっていた——といった具合である。

かくて、新しい文学の出現を望んで提出された「問題文芸論」も、年頭から活潑な反響をよびながら、ついに確然たる体をなしえないままに年の暮を迎えなければならなかった。くだくだしく

たどってきたその論義は、しよせんただにくだくだしいだけのものではあったのか。この小稿にもまた、なんらかの結論がみちびかれなければならぬ。

・「新潮」十二月号で青頭巾は、本年の文壇乃至思想界は「観照本意から要求本意へ、静から動へ」という傾向をつよめてきたといい、星湖の「小さき叫びが意外の反響を呼んだのも、全く趨勢の然らしむところである」といっている。『問題文芸小論』。そして、思想界のオイケン化とかベルグソン化や、またプラグマチズムの顕著な影響を指摘したあと、「問題文芸には即ち文学の功利化を見る」とのべ、さらに「問題文芸の属性に於て功利的といふ事は、社会的といふ事と相表裏する」といっている。

「問題文芸論」の思想的背景として、ただちにオイケンやベルグソンを考えるわけにはいかないが、そういう動向の中でその論義が展開していったことは事実である。そういう意味では、プラグマチズムの流行なども無視できないが、功利的という面でこれを裏づけることは多少飛躍しすぎるようだ。が、星湖の意志とは無関係にでも、それが次第に昂まってきた社会的関心に支えられて進展していった点は認めなければならない。それ自体にどれだけののりがあったかはともかく、文芸と社会との交渉をより密接なものにしていったという事実は、「問題文芸論」の置きみやげとして見逃すことのできないものであった。星湖の提唱とその実践は、けっきょく期待を失望へと追いこむだけのものに終ったが（『新潮』十月『卓上語』）、星湖に出版したそれが星湖をはなれ

たところで、とにかくひとつの覚醒剤としての役割をはたしたことは忘れられてはならない。

なるほどそれは、ついに不熟な未分化なものとして終った。まことに要求されるべき具体的な問題提示は、当初から十分な契機をはらみながら陽の目をみるに至らなかった。「問題」はそれこそごろごろしていたはずである。前年に勃発した第一次世界大戦は、師団増設案や軍艦建造案など、直接間接に国民生活の上に大きな影を投げかけていたはずだし、名古屋における市電運賃値上反対運動の暴動化や大隈内閣下での汚職事件等々、そして大戦の余震による経済的好況をめぐる問題など、とりあげられるべきものはいくらでもあった。にもかかわらず、それらは最後までこの論義の俎上にのぼることはなかった。そういう意味で、ついに焦点を結びえないままに終った「問題文芸論」の時代的意義は大きくマイナスされるとおもう。

一方ではすでに滝田桐蔭の後桶をえた吉野作造の、「中央公論」を舞台としてのデモクラシー運動も活潑化していた。また幸徳秋水事件後の社会主義運動の担い手として登場した大杉・荒畑らの動きも、ようやくかたちをなしつつあった。「近代思想」（大正元年十月創刊）は「平民新聞」（大正三年十月十五日創刊）へとつながたをかえながら、しかもあいづく発禁とたたかっていた。強大な国家権力はそうした民主主義勢力の抬頭に、かなり露骨な圧力をくわえていた。そのような事態の中で生れ育ちながら、しかも、論義はいっこうにそれとの具体的な接触をもちえなかった。わずかに天溪の「デモクラテック・インステント」に富んだ作物」の

要求に関心を示しえたくらいである。この論義の空廻りは、いったいどこに胚胎していたのだろう。そしてそのことと表裏することの論義の時代的意味は、どのように規定されればいいのか。

論義の空廻りをもたらした条件の第一は、星潮の犯した過ちである。そしてその第二は、そこに一因をもつ、具体的な問題提示の欠如ということである。これらについてはすでにくりかえしのべてきたとおりである。第三には、第二の条件を余儀ないものにさせたかとおもわれる時代の客観情勢を考えたい。あえて具体的な問題提示を躊躇させるような傾向をおもふからである。これまでこまかくみてきたとおり、問題がせつかく核心にふれていこうとしながら、ふっとはやけてしまったところに、明示することをさまたげた時代の思想的な抑圧をおもふのである。言論統制の暗い投影をそこにみいだすといったら、それはいい過ぎになろうか。

第四は、大正期の思想の特色のひとつとして考えられる社会国家への関心の稀薄さということである。自然主義の悲観的な気分にあいた人々がもとめた新時代の思想は、理想的、個人主義的色彩を色濃く内包していた。いわゆる白樺派の人道主義や新理想主義、そしてさらに文化主義とか教養主義とかいった思想形成をおしてそのことは顕著だとおもふが、そうした時代一般の傾向が、この「問題文芸論」に反映していたとおもわれるのである。

このことはまた裏返して考えると、さきにもちょっとふれたように、「問題文芸論」そのものが、ある意味で自然主義文学のまさかえしの性格をはらんでいたことと裏腹の関係に立つものであったことを暗示しているようにもおもえて興味深い。あまり素朴に

割り切ってしまうことは危険だが、だいたい以上のような条件が考慮されるとおもう。もちろんその基底に、各人の自覚の欠如があったことは否定しえない。「早稲田文学」がその特集の末尾に『イブセンの取扱った問題』をとりあげ、その中で「時代の底から芽ぐみ出した諸問題を多くの人が未だ自覚しない中に早くも認識してこれを衆人に示す」こと、『問題文芸』の作家は正にかくあるべき」だといっていたが、かれらはおおむねかくありえなかったのである。

かくして論義は各人各説の様相のままに終始したわけだが、そうした種々相の中にも、おのずから時の趨勢に応じこれを促すようなエネルギーがなかったわけではない。熟しきらぬ未分化な発言の中にも、次代の文学を生み出す若々しい胎動はうかがわれたのである。文芸と社会との交渉を密にさせる契機は、さらにその中にデモクラティックな気運をひめていたし、やがて翌五年の声をきいて、漸時かたちをなしていった労働文学や民衆芸術を支える基盤は、除々にかためられていたのである。たとえば、天溪が「デモクラテック・インステントの欠乏」を指摘して、これを克服する新文学を要求したような情勢の中で、「問題文芸論」そのものも側面的にそうした気運を促進するエネルギーになっていったわけである。明確な輪廓はとりえなかったが、多くみられた社会的関心の喚起は、澎湃として起ってきた民主主義勢力を裏うちするものであったはずだ。その提唱がジャーナリストイックだという非難もないではなかったが、話題のすくない沈滞したこの年の文学界に、とにかくもそれほどジャーナリズムを動員できた

ことが、その有力な証拠である。

論争は実を結ばなかった。というより、論争としての体をさえなさぬままに終わったというべきかも知れぬ。概念的な、そして無自覚な発言が、ついに具体的な「問題」に焦点をとらええなかった以上、それも仕方のないことであった。がそれはそれとして、消極的には、多様なそして抑圧された時代の思想状況を反映し、さらにその意味で当時の個々の文学現象を支えていた一般状況をつたえ、積極的には、次代の文学を生みだすためのひとつの趨勢を促したという点において、その時代的意味は十分認められるとおもう。そしてそれ自体としての不熟なすがたはぶさまでさえあった「問題文芸論」ではあるが、その不熟さの中にこそ、一九一五年という、時のすがたがうかがわれるのだとすれば、犯した過ちはそれとして、その発火点となった星湖の提唱もまた、その功を認められるべきであらう。

(一九六〇・六・三)

〈追記〉 スペースの都合で、ここでは「問題文芸論」に対して終始否定的であった田山花袋について言及することを避けた。自然主義者の大正期のすがたとして、また個人対社会という観点に対する個人対自然というその立場を対比して考えることにも、それぞれ興味のある問題がでてくるのだが、すべてはのちの機会にゆずりたい。